

第2回 学校関係者評価委員会

1 実施日 平成31年1月17日(木) 午後4時～5時30分

2 会場 校長室

3 参加者 学校関係者評価委員 山口 幸久(教育振興会会長) 中畠 義夫(教育振興会副会長) ㊤
小野 茂之(教育振興会副会長) 志村 勇(教育関係有識者)
名取 和男(上八田育成会会長) 市川 孝嗣(主任児童委員)
清水 正博(保護者代表・PTA会長 学校関係者評価委員長)
野上 裕美(保護者代表・PTA副会長)
学校側 笹本 仁(校長) 本田 司(教頭)
田原 和仁(教務主任) 横澤 敏英(生徒指導主任)

4 学校側から提案された内容

(1) 教職員自己評価(教務主任) (2) 児童アンケート(生徒指導主任) (3) 保護者アンケート(教頭)についての解説や考察, 具体的な学校の様子を説明した。

5 協議された主な内容

学校側からの説明を受け, 学校関係者評価委員長が座長を務め, 座談会を行った。

※○……委員からの意見・感想 ☆……学校の考え

(1) 家庭教育との関わりについて

○保護者アンケートでは, 「子どもは, 学校のことをよく話す。」「子どもは, 学習がわかり, 基礎学力が身についている。」が低い, これらのことは家庭状況を映し出していると思う。例えば, 保護者が忙しくてなかなか子どもとゆっくり話ができないとか, 基礎学力の捉えも家庭によってまちまちであるとか, そういったことからこのような結果になったのではないだろうか。

☆子どもの家庭での学習に対して, 保護者は感想やサインを書いてくれており, 熱心に関わってくれている家庭が多い。基礎学力の基準については, テストの点数等で判断して実態を捉えていると思う。

○アンケートの結果は, 保護者の要求水準が高く子どもを高めたい気持ちが強く表れている場合等が考えられるが, 保護者から, 学校に対していろいろな問い合わせがあるか。

☆子ども同士のトラブルのことや指導に対する学校の真意が子どもを通して保護者に伝わらず, 誤解が生じたということなどがあり, 問い合わせを受けることはある。保護者と直接話しをすることにより, 理解し合えるようにしている。「先生は, 子どもの話をよく聞き, よく理解してくれ, 保護者からの相談に適切に対応してくれる。」が前期に比べ下がっていることに関しては, 生活面における指導において, 学校の対応と家庭が希望する対応が一致していないことが考えられる。これらのことを踏まえて, 学校と家庭とが連携していく中で共通理解し, 同じ方向を向いて進めていくことが大切である。積極的に連携を図る手段として, 学校からの便り等の活用がある。来年度は, ホームページへの掲載を検討している。保護者だけでなく地域の方に対しても, お知らせして学校教育

への理解を得ることを期待している。

(2) アンケートについて

○学校評価が、教職員の自己評価、児童アンケート、保護者アンケートとして提示されているが、統一された形式になっていないので、統一した方が良いのではないだろうか。

○各質問項目の内容について、例えば、児童アンケートで、勉強がわかるとできるとでは解釈が違ふと思うし、友達と仲良くしているということについては、中には、友達と関わりを持ちたいくないという子どももいるのではないかと思う。また、最近では誉めて育てることが言われているので、アンケートの質問項目に「誉める」といった内容を入れることで、それぞれの立場で意識していくことができるのではないだろうか。

☆教職員の自己評価、児童アンケート、保護者アンケート、それぞれに目的があるので、それらに応じて構成しているため統一されていないが、質問項目を含め内容の検討をしていきたい。

(3) 教職員の働き方について

○学校では、年々課題が増えてきており多様化・複雑化してきている。それらの対応に追われ、先生方の働く時間が増加し問題である。例えば、外国語教育や日本語指導の対応について、心配されるが、どんなふうにしているのか。

☆外国語教育は、5・6年生の外国語科は2時間、3・4年生の外国語活動は1時間をプラスして行っている。火・木の朝の学習の時間を正式な授業時間としてモジュールで行い、時数の確保をしている。日本語指導は、週2回2時間、日本語指導担当の先生が来校して行ってくれている。保護者との対応では、個別懇談など込み入った話をしなくてはならない場合は、県教委を通して通訳を派遣してもらうこともしている。

○時間外勤務が多い先生がいるようであるが、学校の勤務体制など、どういう状況なのか。

☆時間外勤務が多くなる先生は、若い先生にその傾向が見られる。見通しや軽重がうまくつけられないなどで、遅くなってしまうことがある。業務の平均化を進め、できるだけ仕事が偏らないように工夫している。また、ストレスチェックを行い、メンタルヘルスの保持にも配慮している。

(4) その他

○集団登校の際に、班ごと登校時刻に差があったり、班がばらけたりするのが気になるので指導をしたほうが良い。

☆学校でもそういう実態は把握している。登校の時間に差が出てしまうのは、家を出るのが遅くなってしまったり、お休みの児童を連絡不徹底で待っていたりということがあるので、家庭の協力を得ながら指導をしていく。

○市内一斉あいさつ運動に参加した際、児童会の子どもたちがあいさつカードを渡していて工夫した取り組みで、とても良かった。あいさつカードをたくさん貰った子どものは表彰されているのか。

☆賞状伝達の際、併せて表彰した。これからも、学校からの指導と児童会活動としての取り組みを交えて、あいさつが溢れる学校をつくっていききたい。

6 全体評価

全体傾向を把握するため、[A：そう思う][B：ほぼそう思う]という評価を肯定的評価とし、それらの合計が80%を超えている場合は『満足できる状況』、[C：あまりそう思わない][D：そう思わない]という評価を否定的評価とし、それらの合計が20%を超えている場合は『改善の余地がある』と判断

している。

(1) 教職員自己評価について

36問中35問において、肯定的評価80%を超えている状況から、満足できる状況にあると考えられる。改善の余地があると判断される内容は1問のみで、「朝の学習（15分間）は、基礎学力の定着をめざしながら、効果的に実施している。」である。基礎学力の定着は、保護者アンケートにおいても課題であり、朝の学習の時間の大切さを教職員が意識して、基礎学力の定着を図っていく。

(2) 児童アンケート評価について

11問中8問において、肯定的評価80%を超えている。改善の余地があると判断される内容は、「自分で考えたことを、進んで発表している。」である。前期から同じような状況が続いている。あいさつができると発表も得意という傾向が表れていることから、関連付けて指導していく。

(3) 保護者アンケート評価について

20問中18問において、肯定的評価80%を超えている。満足できる状況と捉えることができる。改善の余地があると判断される内容は、「子どもは、学校のことをよく話す。」と「子どもは、学習がわかり、基礎学力が身についている。」である。特徴的なのは、保護者は学校が基礎学力の定着に積極的に取り組んでいることを高評価しているのに対して、我が子の基礎学力は定着していないと回答している点である。このギャップを埋めるように、家庭と連携しながら学力の向上に向けて取り組んでいきたい。

(4) まとめ

各評価について、前期同様高い水準で肯定的に回答されている。教職員自己評価については、前期の回答を受け、取り組んできていることから全体的には向上傾向にある。しかし、児童アンケートや保護者アンケートでは、改善の余地があるとされる項目は前期と同じような傾向にあり、なかなか改善できていないという厳しい状況にある。

7 今後の課題として意識されたこと

(1) 学力の向上とりわけ基礎学力の定着について、保護者は問題意識を持っている。教職員自己評価からも学習指導を充実させていく課題が浮き彫りになっているので、工夫しながら取り組んでいく。

(2) 思いやりといった豊かな心の教育を継続して取り組んでいく。あいさつ等、日常的な生活習慣を教師の指導と児童会の活動で身に付くようにさせるとともに、特別な教科 道徳の授業を中心に学校全体で、道徳性を育てていく。

8 特記事項

特になし

記載責任者

学校関係者評価委員会委員長（PTA会長） 清水 正博